

マスクの使いかた

この物語は幼く巨乳な女子高生が教師に脅迫され、日常使いになったマスクを用いて変態的な性行為を場所を問わず求められ、強姦される話である

目次

- 1 凌辱マスクフェラ
- 2 少女マンコに寸止め焦らし
- 3 女子高生と口移し性交
- 4 マスク製ビキニで着衣性交

1 凌辱マスクフェラ

古ぼけたアパートの小汚い六畳間。ここはある男の『ヤリ部屋』である。そこに一人のセーラー服姿の少女が立ちすくんでいる。今年、高校一年生になったばかりの生島愛美（いくしままなみ）は、部屋の主に力無い視線を送っていた。

「きょ…教頭先生…。今日は何をするんですか…？」

声をかけた相手は愛美の通う高校の教頭、小沼田耕三（おぬまたこうぞう）である。五

十半ばのその体軀はでっぷりと肥え太り、顔も腹もだらしく贅肉が垂れ頭皮は禿げあがり、その容貌は醜悪そのものであった。

それに対して、愛美は実に麗しい美貌の持ち主であった。人形の様に整った魅惑的な目鼻立ちが、小さな顔の中に完璧と言えるバランスで収まっている。

少し垂れ目気味な大きな目は、幼く大人しく、従順そうな印象を与え、男の加虐心をそそる。二つに結われたサラサラのツインテールの黒髪は腰に届く程長く、流麗に艶めいていた。

小さく華奢な体軀に不似合な、十五才にしては大きすぎる九十四センチの豊満なグラビアアイドル級の I カップの乳房は身幅の薄い制服を押し上げ、胸元のリボンが上向いてし

まっている。

キュッと締まった五十六センチの細腰は彼女の華奢さを演出し、ぷりんと小生意気に上向いた形の良い桃尻は八十五センチ程もある。

その造形は男を悦ばせる為だけに仕立て上げられた精巧なダッチワイフのようで、幼い顔立ちながらも堪らない色気をムンムンと放っていた。

この生島愛美の瑞々しい若さと整った美貌を兼ね揃えたドールライクかつ極めて性的なナイスバディは、おおよそこの狭く小汚いアパートに存在するだけで違和感を覚え、不釣り合いなものであった。

そんな彼女がこんな場所で自分が通う高校

の教頭に怯え、こうして佇んでいる理由を知るには、今より少し時を遡る必要がある。

…それは今から、数週間前の事である。

「え…！きょ、教頭先生…こんなの、いつ録ったんですか…！」

愛美の通う共学の高校で、放課後に誰もいない視聴覚室に呼び出された彼女は目に動揺の光りを浮かべていた。

「クッヒッヒ…！　これは大問題だよ生島君

…。これを公にするかしないかは、君の態度次第だ…」

下卑た笑みで脅迫する小沼田は、愛美にある映像を見せている。

大画面のテレビには、愛美がこの学園の理事長であり彼女の父親でもある神谷敦と、あろう事か校内の廊下で立ったままた向かい合いまぐわっているシーンが映し出されていた。

父の神谷と愛美の姓が違うのには別の理由があるが、ここでは割愛する。

『あっ！ あんっ！ ぱぱ…ぱぱあ！ おまんこ気持ちいい…おちんぽ、ぶっとおい！』

幼く清楚な顔立ちに似合わぬスケベボディーをした愛美が、あられも無い下品で妖艶なアニメ声で喘いでいる。廊下の真ん中で堂々と対面立位で密着し、ズコズコと性器を抽挿され雌の悦び声をあげている姿は、どんなアダルトビデオよりもリアルで卑猥であった。

愛美は以前から父親と肉体関係にあり、暇を見つけてはこうして神聖な学び舎の中で近親相姦に耽り、肉の悦びに浸っていた。度重なる性行為はついに教頭である小沼田の目に止まり、動画に収められてしまったのである。

理事長であり父親でもある男との校舎内の性行為。これを教育委員会にバラされたくなければ肉体を差し出すように小沼田は脅迫してきた。頷くしかなかった愛美はその場で惨たらしく犯され、数時間の内に穴という穴

を淫行教師の醜惡な肉棒と舌で嬲られる事となる。

こうして愛美は小沼田教頭の肉奴隷となり、その若い体を好き放題に犯される関係を持つに至った。今では校舎内だけに留まらず、小沼田所有の『ヤリ部屋』に呼び出され、思う存分にセックスされる事もしばしばだ。

「今日はね愛美、このマスクを付けてプレイをしよう」

「え…マ、マスクですか？」

小沼田が手に持っているのは、見慣れた不織布の布マスクの大きいサイズの物だ。それを差し出され、訝し気に見つめる愛美。

この薄生地と性行為との関連性を想像できず、困惑しながらも命令に従い装着した。セーラー服姿にマスクを付けた愛美は、顔の半分程が覆われた状態になる。

「ぶっちゅうううう！」

「ふぶうん!？」

小沼田は、マスクの生地の上から乱暴にキスを仕掛けてきた。薄生地越しに感じる太い舌とでっぴりした唇の振れ具合は、愛美にこれまでに無い新鮮な感触を送り届けた。

愛美の動揺を意に介さず、小沼田は強引にマスクごと貪り口付けを続ける。若干ゴワつく不織布マスクの生地が直ぐに唾液で湿り、愛美の甘い口中の臭いがムワンと漂い始める。

「ちゅぶちやぶ！　ウム、こういったマスクの使い方も良いものだ…なあ愛美？」

「れぶ…！　えああ！」

べちゃべちゃとした生地越しに舌を絡める感触に、愛美は悍ましさを覚えたが同時に興奮もしていた。父親ともシタ事の無いアブノーマルなプレイに、若い雌の体が意志に反して反応してしまっている。

気づけば小沼田の唇と舌を受け入れ、自らも能動的に上唇と下唇を動かし、マスク越しの接吻に夢中になってクナクナと舌に唾液を乗せて絡ませていった。度重なる小沼田からの強制性行で、愛美の肉欲は以前より遙かに増していたのである。

「ウ…むあん…。 はあはあ…！ アハン…！」

ウフンムフンとくぐもった妖艶な鼻声が漏れる。愛美の興奮を察した小沼田は、気分良くヌコヌコとマスク越しの舌入れキスを愉しんだ。

「ふ…！ ムウン!? うむあ…。 あ…当たってる…！」

小沼田は向かい合って立ち、キスをしながら愛美の八十五センチの丸い桃尻をギュウと掴み、制服のプリーツスカートの上から好き放題に揉んでいた。

密着したその状態で、勃起が愛美の下腹部

に押し付けられている。

「今度はワシのおちんぽ様をそのまましゃぶってもらおうか…？」

そう言うと、小沼田は愛美を自分の前に跪かせた。そしてマスクを付けたままの愛美の口へいきり勃った肉棒を押し込み、生地ごと口中へと突っ込んだ。

「ふぁぶううう!!」

未知のフェラチオに、愛美はまたも驚嘆する。先端の力りが滑らかな生地のマスクに包まれ、その奥の口中の温かさを感じる。

小沼田は有頂天だ。

愛美の側頭部に両手を添え、サラサラの黒のツインテールの感触を愉しみながら、毛束を馬の手綱の様に握って乱暴に前後に揺すった。

「うっ！ うぶっ！ ああぶう！ うふうん！」

「どうだ愛美？ 人生初のマスクフェラチオの感触は？ いいか？ いいのか？」

「ふええアアあああ…！」

モノの様に扱われながらも、愛美の瞳に艶がかった妖しい光りが灯る。

元より苛められて悦ぶマゾヒストの性癖がある愛美は、こうして男に強引に性行為されると興奮してしまう少女だった。

そのドMな性癖を父親に開発、調教されてきたが故に、小沼田の強姦まがいの口腔淫行にも反応してしまうのは、その悲しい気質が故なのである。

人形の様に美しい顔立ちをした少女が跪いてこちらを見上げ、熱っぽい上目遣いで見上げながらマスク越しに舌を絡め喘ぐ姿に、小沼田は極度に興奮しゾクゾクした快樂が背筋を走る。

マスクの柔らかさ、生地越しの愛美の唇の弾力、舌の温かさ、発情し色めきたったアニメ声。その全てが小沼田の頭に血を上らせ、射精が近い事を予感させる。

「ああ愛美…出る！ マスク越しに射精する！ おお…おおっ！」

どぽっ！ ぽびゅるっ！ びゅるるる
る—————！

「んぐふむうん！」

中年の黄ばんだ濃厚精子が、愛美の口へと注がれる。その猛々しい雄汁の勢いはマスクを貫通し染み出して、愛美の口内へとジュクジュクと侵入していった。

「ふぐっ…！ むうん…！ …ちゅっ！
ちゅるるる…。 ちゅずううううううう
う！」

なんと愛美は、マスクで濾されたクリーム状の精液を生地ごと吸って口内へと導いた。明らかにこの変態行為を拒まず、受け入れている態度に小沼田も嬉しくなる。

「ン…、グっ！ んむふう…！ アム…はむれろ…。 ええろお…」

更に生地ごとチンポを咥え、舌を突き出してお掃除フェラまで敢行する。不織布のマスクの生地が小沼田の肉棒を包み、チョンチョンと舌で突っつかれ、柔らかな感触に酔い痴れる。

「ああ…何てはしたない…！ 何てドスケベなんだ愛美…！ ふふ、お前もこのマスク越しフェラプレイを…変態的なマスクフェラを

気に入ったようだなあ…ほれ！　ほれほれ！」

「んっぶう!?　はむぼお！　ンンふれえ…！」

愛美の従順な態度に気を良くした小沼田は頭頂部に手を置き、慣れ慣れしくヨシヨシする。そうして撫でながらも腰を突き出し、チンポの先端でマスクの生地を愛美の口中に押し込んだ。

現役の女子校生を、それもまだ去年まで女子中学生だった高校一年のピチピチの十五才の娘を上から見下ろし、マスクが伸びる変態フェラをさせている光景は実に淫靡かつ卑猥で、小沼田は男として人生の勝者となった様な気分になり悦楽に浸る。

「どうだ愛美？ マスク越しにしゃぶるチンポは。 ウホッホ、感想を言っごらん？」

調子に乗った小沼田はそんなセクハラ質問を投げかけた。話しかけている合間にもグリグリと勃起をマスクごと押し込んで、薄生地越しに愛美の唇と舌、口中の感触を愉しんでいく。